

環境事始 十七帖 中国留学生を世話した経緯 横浜国立大学 名誉教授 加藤 龍夫

ある日建築の後藤教授が研究室を見せてくれと中国の留学生を連れて来た。内モンゴル包頭製鉄会社の廉浩氏だった。一通り案内して調査など説明したら、真剣な形相で明日からこちらに来ていいかと頼んだ。実は環境の勉強したいのに建築に配属されて一年、場違いで悩んでいたのだ。こうして明日から河岸を変えて半休先生が世話することになり、大気、水質の調査、GC-MSの操作を教えた。これが機縁になって、烏蘭、馬丹、朱曉民、楊小貝、馬銘、姜璐、高娃と次々に留学生が居附いて賑やかになった。先生は考えた。中国は社会主義国、彼女らが帰国して政府高官になったら、日本で手間の掛かった対策も命令で徹底出来るだろう。無論これから工業化する国に公害技術は不可欠であるから先生も花井も学生達も親身になって生活と勉学を援助した。他所ではそうでは無かったらしいが、先生の処は日本も中国、台湾、韓国その他も分け隔てなかった。これも環境研究の一齣、今思い出して以下にその一端の状況を示す。彼女らは国では知識階級だが経済的には苦しいのを覚悟して来ており、皿洗いなどさせては日本の恥である。結局五人分だったが月十万円づつ二年間工面した。利発で美人だからと社長共に説いて負担させたのである。ある日教室で独りで泣いている。訊けば一緒に下宿している姉が家財道具一切持ち出して男と家出して、家賃も払えず今日から暮らせないと。布団だけは残したと云うから、教育の学生が付き添って鍋釜食器から食料、机、暖房器など町に買いにやり、応急に家捜しに歩いたこともある。日本は外国、研究室以外に頼る処はないのだ。経済や経営の連中も先生の処は自由にコピーしていいので出入りした。彼女らは本一冊分を複写してゆく。だから国に帰り大学に勤めて語ることは、勉強した経済学など何の為にならなかつたが、日本各地温泉旅行してしめじ鍋やとろの刺身を食べた経験が一番役に立ったと今も感謝されている。文部省は十万人留学生の方針を立てたが、可笑しな先生がいて、英語の試験をするから留学生は合格せず定員に満たない。二ヶ国語なら何故中国語を課さないのか、彼らは英語を習ってない。環境研を希望して三度も受験させるとは迷惑至極、彼女らは秀才なのに。例えば全然日本語を知らないのが、電話の掛け方から始めて半年でペラペラになる。大学は専門家集団、頑迷固陋が多くて、環境研究を阻害し、国益に反し、国際親善を損なう。昔戦争した指導者もそんな連中だったと知る。留学生達は全国環境調査をし、GC-MSの扱いを習って中国人で最も高い技術を具えた筈である。中には研究を発表させた。廉さんは秋田の大気汚染学会で「石炭排煙中の芳香族成分のGC-MS分析」を講演した。この時先生が茶目で拍手したら聴衆の大拍手となった。彼は国に帰って政府高官に出世した。烏蘭は旅順の大学、馮芳は北京の大学の先生になり、馬丹、楊小貝、姜璐、高娃は日本人と結婚して住み着いた。多分次世代になって教育の効果が現れよう。勿論日本の学生に付いても同様環境教育が直ぐに役立つとは思わない。ただある期間環境を守る仕事に携った経験が目立たぬところで地球の安全に寄与すると信じている。先生は彼女らが日本は森林と海岸でありビルや車の国でないと知るように指導した。米国に占領されてなお、何百年培った自然崇拜に立脚する国である事を教えた。何よりも彼女らの幸せを願ったのである。